

「がんこに平和」
「暮らしが一番」の闘いを強めます
社会民主党福島県連合代表 狩野光昭

第26回参議院選挙は2022年7月10日投票で行われ、平和憲法を堅持し守り抜く社民党を無くしてはならないとの決意の戦いが、社民党の得票数は125万8501票、1議席の確保、得票率は23%で政党要件を確保しました。

福島県内の得票数では35,717票。得票率は47%で、2019年参議院選挙及び2021年衆議院選挙の得票率を大幅に上回りました。社民党福島県連は、離党により党員数が半減した中での闘いでありましたが、厳しい情勢の中でも、党の存在を期して得票目標も4%に設定し、全党上げた闘いを構築しました。

社民党福島県連として、選挙の争点を。

1. 平和憲法を守る。防衛費GDP比2%反対。
2. 暮らしと命を守るために非正規・貧困社会からの脱却。消費税の3年間ゼロ。
3. トリチウム汚染水海洋放出反対。

また、全国比例区の選挙とともに福島選挙区の
小野寺彰子候補者とセットでの闘いを展開しました。

具体的には、社会新報福島県連合号外版を作成、全国的に新聞折り込みの実施、全国連合作成の社会新報夏季号の配布。党員の親書、電話による投票依頼。政連車による街頭宣伝など、精力的に取り組みました。このような原則的な闘いのなかで、社民党福島県連の3つの争点を徐々に県民に浸透していくなかで、「社民党をなくしてはならない」「ギリギリの生活をなんとかしてほしい」「汚染水海洋放出反対を主張している社民党に期待している」などの声が大きくなっていきました。旗幟鮮明にすることで社民党への期待も大きくなり、得票を大きく伸ばしました。

社民党組織が高齢化しているなかで、今後は、若い人、女性などへの働きかけを強め足腰を強めていくことが求められています。その課題解決にむけ、来年の統一地方選挙においては社民党議員の空白区である福島市及び郡山市の議会議員選挙に候補者を擁立し勝利することを最大の目標としていきます。

今後、憲法改正が狙上りのぼることは間違いない、国民のいのちを守るためにも全力で阻止しなければなりません。「がんこに平和」「くらしが一番」を貫抜き、活動を強化していくことを訴えます。



昨年10月の衆議院選挙後、社民党内は危機感に覆われました。小選挙区では一議席(沖縄選挙区)を守ったものの、比例代表選では議席を獲得できず、得票率は17%にとどまったからです。公職選挙法で「国政政党」と認められるには、国会議員が5人以上いるか、または直近の衆議院選挙か参議院選挙で2%以上の票を獲得していることが要件となっています。

前身の旧社会党から数えて77年の歴史を持つ社民党です。かつて旧社会党は、保守勢力の自民党に相對する革新勢力として野党第一の座を占めてきました。1986年、初めての女性党首として委員長に就任した土井たか子は、その3年後の参議院選挙で女性候補を次々と擁立し「マドンナ旋風」を巻き起こし、自民党を過半数割れに追い込み、当時土井委員長が述べた「山が動いた」という言葉はいまも語り継がれています。そして迎えた開票結果は、比例代表で1議席を獲得し、得票率も23%と「2%」を超え、国政政党の政党要件を維持しました。

しかし、党所属の国会議員の数は衆議院1名、参議院1名の2議席のままです。今後も、党の存亡がかかった選挙が続くことになることを肝に銘じなければなりません。

(文責・OB・Gの会事務局長・降矢)

【お断り】 字数などもあり、狩野代表の文章の一部を修正させて頂きました。代表にはお断りをしました

(事務局)

【「つづいて」】
気づいたと、感じたこと】

フラン75・自らの生死を選択できるか

映画館には久しく行っていない。そして今般「フラン75」という映画に関心を持った。しかし地元での映画館の上映の予定はない。そこで福島市まで行くとなるのだが、「この猛暑の中の往復のきつさを考えると出かける足を鈍らしてしまった。そこで「ユウチユーブ」による予告編、あるいは試写会の後の出演者を交えた「トークショー」を見ての、一高齢者の感想を提起したいと思う。

最初に、映画「フラン75」あらずじ・キャストである。そして見どころのまとめとしての「75歳から“自らの生死”を選択できる制度」という中身を紹介したい。

少子高齢化が一層進んだ近い将来の日本。満75歳から生死の選択権を与える制度【フラン75】が国会で可決・施行された。様々な物議を醸していたが、超高齢化問題の解決策として世間はすっかり受け入れムードとなる。夫と死別してひとりで慎ましく暮らす角谷ミチ（倍賞千恵子）は78歳。ある日、高齢を理由にホテルの客室清掃の仕事を突然解雇される。住む場所も失いそうになった彼女は「フラン75」の申請を検討し始める。一方、市役所の【フラン75】の申請窓口で働くヒロム（磯村勇斗）、そして死を選んだお年寄りにその日が来る直前までサポートするコールセンタースタッフの瑠子（河合優実）は、このシステムに強い疑問を抱いていく。また、フィリピンから

単身来日した介護職のマリア（ステファニー・アリアン）は若い娘の手術費用を稼ぐため、より高給の【フラン75】関連施設に転職し、利用者の遺品処理など複雑な思いを抱えて作業に臨む日々を送る。そして「フラン75」に翻弄される人々が行く着く先で見出した答えとは何か。

超高齢化&少子化社会のひずみは、現代の日本を生きる私たちが日々痛感している。

「フラン75」はそこに果敢にも切り込んでいた。

「死を選べる制度」を描く作品となると、倫理的には「問題作」に違いないのだが、現実問題として挙がっているテーマであるだけに私たちの実感と結びつくものを痛感する。

まずは「フラン75」が生まれた背景について早川千絵監督は、「自己責任論がはばをきかせている日本の社会において、社会的に弱い立場にいる人々への風当たりが強く、どんどん不寛容な社会になっていっていると感じていました」と語っている。さらに「不寛容」は「コロナ禍においてより一般的な問題意識になってきたものの、それ以前から顕在化してきたことも忘れることはできない。

同時に思い出すものに自民党菅首相の就任記者会見がある。「まず自助」を、そして共助、公助という発言である。率直に言って、自己責任論が強化され、困っている人が「助けて」と言いづらくなるだろう。「まずは自分でやる」ということは誰でも分かっている。でもまずいたとき、転んだとき多くの人は一人では起き上がれない。しかも発言をされたのは、新型コロナウイルスの感染拡大の中にあつて急速に人々の困窮が深まり、孤立

を深めていた頃であった。「困ったときは頼っていい」というメッセージが必要な時期であった。

しかしそのような時にあつても、日本のリーダーが「まずは自分でやりなさい」と述べている。それは「助けが必要な人の口を塞ぐ。最悪のメッセージ」であった。

映画を見ての感想が幾つか掲載をされていた。その中から次の二件を紹介したい。

「現在は98歳・要介護4と、92歳・要介護5の両親を働きながら在宅で面倒みている。日々布団での睡眠は2〜3時間。疲れきつて地獄だなあと思います。誰にも邪魔されずにゆっくり寝たい。時々自分の方が先にぽっくり逝ってしまったらどんなに楽かと思えます。人格が変わってしまった両親を見ることも辛いです」。

「年寄りが生きている事が、働く世代の者にとって悪であると言う方向にならなければいいが。また年金という国家財政を浪費し、認知症になれば介護を必要とする老人となり、その長生きが邪魔だというみだいな風潮が生まれなければいいかと思えます」。

最後に、早川監督の次のメッセージを紹介したい。「生きづらい人に対して、死の選択肢を差し出すような社会と、共に生きようと手を差し伸べる社会と、どちらに生きたいか。私は後者を望んでいます」と。

ちなみに主役の倍賞千恵子さんは、この6月、81歳の誕生日を迎えている。



7月2日発生の「通信障害」から学ぶ

「これから先、実家の母が心配です。いずれはおひとりさまになるだろうし、地方なので外出の足が心配です。そんな母から『スマホを教えて欲しい』との連絡がありました。それは良かったなあと思います。これでスマホでのショッピングを覚えれば買い物難民から脱出できる。キャッシュレスで銀行にも行かずに済む。母にとってはいいことだらけと思いきや、これは教えるのが大変だ。なにせ、パソコンも触ったことがないのだから。それに、遠く離れているところからの電話指導である。それでも何とか使いこなせるようになりました」と。

以上のような体験記を読んだことがある。

そして今般、KDDIで7月2日未明に通信障害が発生した。そして全面復旧をしたのが86時間後であった。さて前記の母親のスマホは、この通信会社であるかはわからないが、この時期遠隔地にいる娘さんの心配はいかがであったろうか。何せ3日を超える不通である。全国各地で多くの混乱が起きていたことは報じられている。例えば119番がつながらないとか。コロナの自宅療養者の症状の変化を保健所に報告できないなど。いずれも、けが人や急病人の命に別条はなかったが、異常な状態が続いたことは間違いない。

固定電話(家電など)が今住んでいる自宅にあるか、どうかの調査によれば、全体で固定電話が「ある」が56%、「ない」人は44%となっている。

(「LINEリサーチ」2021年12月16日)

しかもスマホや携帯電話からでは、家にある固

定電話には繋がらなかった。これでは緊急に間に合わない。そして若者が自立をしていく過程で、スマホや携帯電話の使用が確実に増えていく。

残されていた「芯式のストーブ」が働いた

当時の一般家庭の室内暖房には「芯式灯油暖房器」が使われていた。そして1978(昭和53)年、より安全な「灯油ファンヒーター」が市場に回り始め「芯式から温風」への切り替えが始まり、1980年には約100万台程度の流通になった。

丁度その年の12月クリスマス・イブの日。正午以降降り始めた雪は福島県中通りを直撃し、職場の退社時にはバイクの運転も困難な積雪となっていた。交通機関の多くは全面不通。やがて積雪の重みで鉄塔が倒れるなど。そして「電気・ガス・水道」などの全面ストップが2日間続いた。私の家では残しておいた「芯式ストーブ」が働いた。

水は豊富な「庭の雪」がある。食事も「暖」もとることができた。ファンヒーターでは「食事も暖」も取るとできず、雪をかき分けて出向いた店舗の棚も空。生活手段のすべてが完全に行き詰まったことが後日談として語られた。

「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すというのが事実である」

(「天災と国防」・寺田虎彦)

便利が高じれば高じるほど危険は拡大する。そのような状況にいつ襲われるかは知らない時代であることを、今般の通信障害から学ぶべきと思う。常に先を見据える対策の準備を怠ってはいけない。



報告・提言のひろば



■いよいよ明日から参院選が始まりますね。なんとしても社民には頑張ってもらいたいです。中村哲さんの言われた通り、軍事力があれば守れるのは全くの勘違い、ですね。憲法9条をもつ日本こそがウクライナ戦争の仲介を取れたと思うのですが、9条という宝の価値に気がつかない与党、困ったものです。久保孝喜候補の理念の中で述べられている沢内村の深沢村長の話は、以前読んだことがあります。素晴らしいですね。小野寺あきこさんにも頑張ってもらいたいです。

■いよいよ明日公示の参院選がはじまります。「大分県の6者協議」は、連合、平和運動センター、立憲、社民、国民民主で「足立信也」でやることになっています。連合が主体的にやるので、われわれは手や口を出す場面はありませんが、立憲の政策ピラに「足立」のリーフを入れて、150枚ほど昨日戸別ピラ入れを行いました。立憲のポスターも明日立てて歩きます。福島も頑張ってください。

■はじめまして。東京北区も、社民党は1と2に別れ、残ったのは今まで党组织運営に携わっていない者が殆どです。そんな中で先輩たちを先頭になんとか頑張っています。残念ながら自分も自由に動けない状況ですが、なんとでもこの選挙は勝たなければ日本の未来はありません。精一杯頑張っています。「頑張る地」は異なりますが志は同じ。共に祝杯をあげることができるように。

■喜多方耶麻地区でもこの参議院選挙に一丸となって運動を展開しています。何とか2議席確保したいものと祈っています。この世界の現実の中で、中村哲医師の生き方はまさしく一筋の光明です。小生も農民として、人を生かす物作りをしていますので、人殺しの兵器や戦争はまっぴらです。また、沖縄の方々が、自分の農地を人殺しのための軍事基地に強制的に使われていることに忸怩たる思いをしていることにも共感できます。喜多方市議会6月議会定例会に、沖縄を「捨て石」しない安全保障政策を求める意見書提出の請願を提出しました。賛成9反対12で不採択でした。反対の理由に、沖縄の大変な状況は理解できるが、この状況では致し方ないと言っているのが、主な理由です。大変な状況を理解していません。残念です。

■「青春とは、ある期間では無く心の様相を言う」のだそうです高齢だからと決めつけずお互い一生青春？を貫きましょう。遅れましたが、先月に小生が返信した小生の「町内会」行事に関する取り上げて頂きありがとうございます。ウクライナ問題もさることながら、いよいよ参議院選の公示、投票日も決まりこれからが大変だと思えます。自民も議員の問題を直近で抱え選挙戦に影響は必至でしょう。野党もなかなか意思の統一が今一と思われませんが、何とか高齢化社会等の対策が国民に理解を得られる事を希望します。■まさに老老介護の世界を体験しています。92歳の母と1年半、狭い仮住まいと一緒に生活しました。今月28日に新居に引越します。4世代

住宅です。2階には娘夫婦と孫がきます。人生最後の大引越しをいま始めています。

■6月23日の今日で70歳を迎えました。さる6月12日に、90歳の父親を見送り、何かと後処理でバタバタしております。参議院選挙の行動などの調整は他の人にお願ひしています。出来ること、やれることを精一杯やります。

■マスコミも含め、体制的攻撃は社民党潰しに血眼です。「寝た子も起きて」の頑張りで全力投球です。

■最高裁の「生わい訴訟判決」は残念な結果に終わりました。この判決が同様の裁判にも影響を与えることを考えると残念です。指摘のように「国が国策として、安全神話を広める中での原発推進に対する結果」です。まさにその通りだと思います。判決文を読みましたが不可解な印象が残る内容でした。判決は裁判官の一致した意見ではなく3・1の結果でしたが、判決文全54頁のうち、3名の多数意見に反対した三浦守裁判官の反対意見が半分以上の29頁にもおよび、また多数意見(判決)は原子力関連法にもとづく判断をしたというよりも、津波が想定以上だったから、対策を指示しても事故は防げなかったことを根拠としたような内容に見えました。「国の責任」に対しては最高裁の判断が出たことになりませんが、進行中の東電幹部に対する裁判(刑事裁判、株主代表訴訟など)は東電幹部の責任の追求です。刑事裁判の東京地裁の判決では根拠として「長期評価の信頼性」を認めなかったわけですが、今回の最高裁判決では「長期評価の信頼性」を

否定しておらず、現在高裁にある刑事裁判の地裁判決の根拠が崩れる結果でもあったことを注目しています。東京は9日連続の猛暑日ですが少し疲れてきました。今日は久々の雨で少しホッとしています。参院選ですが、近くで福島みずほ党首の選挙街宣があり妻と二人で行ってきました。服部良一幹事長も一緒に、世田谷の保坂展人区長、評論家の佐高信氏なども応援に駆けつけていました。なんとか政党要件を満たしてまた国会に戻ってきていただきたいと願うばかりです。

■社民党2パーセントをクリアできるとりあえずホッとしたというところです。中央はしっかりと総括をしてほしいと思っています。私たちの支部も時間をかけて総括議論をしたいと思っています。次の統一地方選に向けてどう戦うか。また特に若い人たちをどのようにして社民党につなげられるのか。大きな課題だと思います。また、今回の結果、改憲派が多くなりました。社民党にとつては、党の再建と同時に「護憲」運動の在り方についても大きなテーマになったのではないかと思います。私は「社民党はよかつたね」と言っているのではないし、大きな課題が突き付けられたという思いをあらためて強くしています。選挙が終わるまではと無理して頑張ったこともあり、体がたがたです。14日から入院し、脊椎間狭窄症の手術をすることにしました。回復は8月半ばぐらいまでかかりそうです。少し療養したいと思います。

